

よい山づくりをめざして (カラマツ造林と今後の考察)

小坂宮林署 市 村 義 一

1. はじめに

小坂宮林署は、昔は天然ヒノキ、今は東濃ヒノキ最北端のメッカとして発展してきたところである。

そのため、小坂はヒノキということで造林においても、ヒノキがすべてと見られているくらいがあった。確かに小坂のヒノキは良いが、立地条件によっては天然更新と共に問題を抱えているところもあり、あまり世間に知られていない感じがしてならない。

当榎谷担当区は、東濃ヒノキの名声の中にあって、日のあたらぬ森林を受持っているところである。そして、主な造林樹種はカラマツであるが、ときとして、あんなものは駄目だ、伐採してカンバにした方がましだ等々、カラマツに対する不人気には根強いものがあり、それがもろに我が職場にぶっつけられている現状にある。

果して、カラマツによる山づくりは駄目なのか、現状の認識と将来の展望を我々なりに見極めて進めることが、我が署の我が担当区の職務意欲を向上させ、良い山づくりの糧となるように取り組める所以である。

2. カラマツを理解するための取り組み

(1) 職員のカラマツに対する理解度を見る。

職員がカラマツに対してどの程度理解しているのか、簡単なアンケートにより管内の主任、補助員及び榎谷担当区班、小黒川担当区班に分けて集約してみた。

榎谷担当区班では、このとりまとめの過程のためか、やや理解しているが、ヒノキ主体の小黒川担当区班ではカラマツに対して批判的な意見が多いようである。主任の中にも批判的な意見があった。

表-1. カラマツについてどう思いますか。

樫谷担当区では、カラマツを主に造林をしています。日頃造林事業を担当してみえる皆様のカラマツに対する意見をお聞かせ下さい。

		主任	補助員	樫谷班	小黒川班	全体
カラマツの植付について	ア立地条件に合えばよい	80%	50%	65%	40%	55%
	イヤめた方がよい	20	30	35	60	42
	ウその他	0	20	0	0	3
カラマツの将来性について	アあると思う	80	50	50	30	49
	イない	0	30	30	50	36
	ウその他	20	20	20	20	5
カラマツは何に利用されているかと思いませんか		杭 木 土木用材 家具材	土木用材 家具材	土木用材 家具材	土木用材 家具材 パルプ材	
カラマツを植えていて今までどんな気持ちでしたか。				○外の樹種の方がよい ○ムダではないと思う。 ○風のため成林するか心配 ○治山治水のためになる	○はりこみがない。 ○植える気にならない。 ○雑木林にした方がよい	

(2) 班で勉強会等を開く

担当区では、植付をはじめ保育関係もカラマツが主体となっており、カラマツ抜きの造林事業は考えられない。そこで班全員がカラマツを理解するために勉強会を開いたり、カラマツの利用状況を知るため、飛騨地区の木材業界、製材工場、家具メーカー等を視察した。

また、山づくりに対する林業関係者と話し合いを持った。

(3) 小坂営林署のカラマツの実態

ア 樹種別造林面積

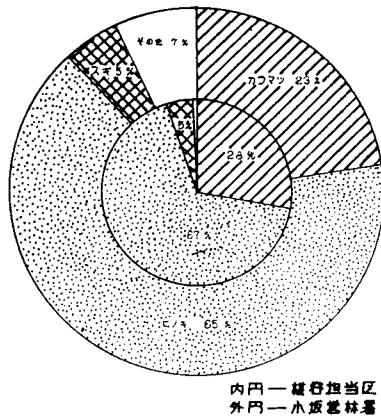
担当区では、カラマツが署全体に比し5%も多く、約3割を占めその面積は292haにおよび主要な樹種になっている。

表-2 樹種別造林面積

樹種	榎谷担当区		小坂営林署	
	面積 ha	%	面積 ha	%
カラマツ	292	27.8	2,090	22.6
ヒノキ	704	67.1	6,043	65.5
スギ	49	4.6	442	4.8
その他	5	0.5	658	7.1
計	1,050	100	9,233	100

図-1.

造林樹種割合



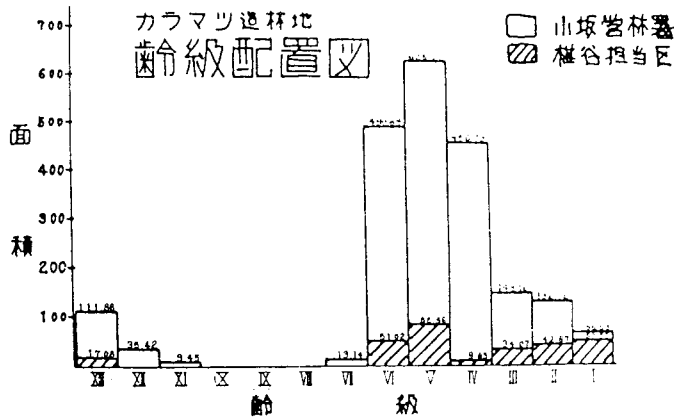
イ カラマツの齢級別面積

カラマツの新植の殆んどが、ここ数年当担当区で実行されている。又署全体では、4 齢級から 6 齢級の林分が75%をしめ、今後間伐が必要となってくると考えられる。

表-3. カラマツ 齢級別面積

齢 級	榎谷担当区		小坂宮林署	
	面積 ha	%	面積 ha	%
I	5 1	1 7.5	6 7	3.2
II	4 3	1 4.7	1 3 2	6.3
III	3 4	1 1.6	1 4 9	7 1
IV	1 0	3.4	4 5 7	2 1.9
V	8 6	2 9.5	6 2 5	2 9.9
VI	5 1	1 7.5	4 9 1	2 3.5
VII	0	0	1 3	0.6
VIII	0	0	0	0
IX	0	0	0	0
X	0	0	0	0
XI	0	0	9	0.4
XII	0	0	3 5	1.7
XIII以上	1 7	5.8	1 1 2	5.4
計	2 9 2	1 0 0	2,0 9 0	1 0 0

図-2



ウ カラマツとヒノキの比較

落合国有林22林班は、明治41年にヒノキを新植し大正13年にカラマツを補植した箇所である。

立地条件によっては、カラマツが立派に成長しヒノキを植えたことの方が、問題ではないかと思われるところもある。(写真1参照)

3. カラマツの将来性について

カラマツの将来性があるのか、ないのかということが現実到我々の職務意欲の向上につながってくると考えた。そして我々は、この取り組みの中からカラマツの将来が非常に明るいということに、確信を持つことができた。

(1) 家具材としての利用

広葉樹を主としてきた家具は、資材の不足に伴い今後量的に確保できるカラマツに着目し、利用研究が進められていた。そしてカラマツのヤニ抜に成功し、すでに家具メーカーでは製品化されており家具としての風格は高く評価され、今後の需要が高まるものと考えられる。

特に御岳山ろくに産するカラマツは質が良く、家具材としては最適であるが、ある程度の太さが要求されるので、間伐材等の小径木はまだまだのようである。

(2) 土木用材としての利用

現在すでに多く使われているが、耐朽性・強度性のあるカラマツが良く、その多くは輸入材にたよっているようである。しかし量的確保ができれば間伐材とともに利用できるということである。

(3) キノコ栽培としての利用

林業新知識でも紹介されているが、ナメコを始めキノコ栽培の試験研究がされており、利用の見通しがついたようである。(写真-5参照)

(4) その他

パルプ材、建築材、家具、電柱、杭木、パレット材、ダンネージ材をはじめ、さらには木目の美しさから、木工品、民芸品等へと幅広く利用が進められている。

また、最近の新聞によるとカラマツの樹皮から強力な接着剤をつくり出すことにも成功している。(写真-6参照)

こうした開発研究の技術進歩には、著しく目を見張るものがあり、カラマツの高度利用はますます増大してくると考えられる。

4. ま と め

- (1) 昭和35～36年頃の林力増強時代のようにすべてがカラマツでは問題があるにしても、山づくりの基本である適地適木ということから、スギ・ヒノキとの植え分けをはっきりしたうえで、造林を進めていかなければならない。

- (2) 高冷地域での更新については、問題点も多いようであるが、資源の少ない日本では成林の早いカラマツにより、公益的な機能をいち早く達成しながら、木材としての利用も進められれば、あながち捨てたものではない。
- (3) 以上のことをこの機会に進めてきた我々であるが、始めは他の担当区から「カラマツなんか逆さに植えてもつく」とか、「そんなもの何の役に立つ」などと言われ、嫌気がさしていた毎日であったが、今では気を取りなおし国有林のきびしい実態の中で、山づくりの出発はたとえカラマツであっても、我々の一日一日の双肩にかかっていることを認識し、活力あるよい山づくりをめざして励んでいるものである。

○ ま と め

- (1) 山づくりの基本を理解することにつとめた。
- (2) カラマツに対して見通しは明るいことを知る。
- (3) 毎日の仕事が楽しくチームの和と意欲が湧いてきた。

写真-1



落合国有林22林班 カラマツ林

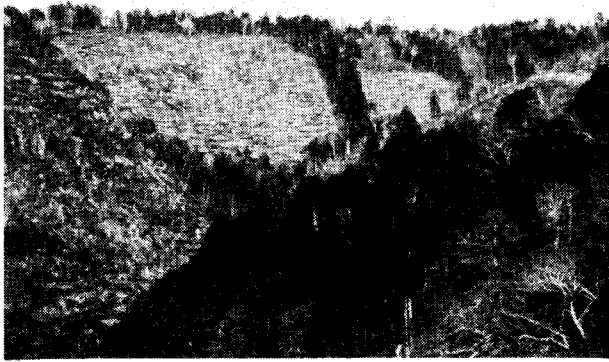


写真-2

落合国有林 103 林班
(標高 1,550 m)
筋刈地拵によるカラマツ造林地



写真-3

落合国有林 103 林班
カラマツ次代検定林設定地

写真-4

カラマツの幼令林





写真-5 カラマツによるナメコ栽培



写真-6 カラマツによる接着剤の開発